

Sotto レビュー

『ことばの向こうがわ —震災の影 仮設の声—』

安部智海著 (法蔵館)2017



宮城県、岩手県における仮設住宅居室訪問活動の記録である。しかし単なる被災者生活の記録にとどまらず、同時にあるいはそれ以上に、訪問活動を通して体験した寄り添いの意味の開墾、深化の記録である。主に失敗や自省の具体的なエピソードを素材に、支援とは、寄り添うとは、言葉を受けとるとはどういうことなのかを問い続ける、支援の姿勢とところのありようをことばの向こう側に求めようとする試みである。そしてその意味探求が、具体的な活動を通じて育まれていく様子が手触り豊かな感覚で読み取れる、世には埋もれた良書である。

本書を通読して多くの読者が想うのは、著者がどれほど豊かにところの畑を耕し続けたか、そしてその耕作結果がどれほど今後の生きざまに最良の糧、肥料になってゆくかということだろう。おそらく著者はこのことに気づいていないかもしれない。だがしかし、表面的な言葉や沈黙、あるいはため息、時には冗談や笑顔さえもが、その裏にあるところ模様を直截に示すものでもないことへの気づきと、注意覚醒、そのうえでの傾聴と言葉のやり取りの重要性を図らずも如実に示してくれるのが本書である。

被災者に多く見られた“まだ自分はまだだから”との思いからくる自己抑制の言葉、姿勢の向こう側になにがあるのかを真摯に見つめようとする深みを感じ取ることができる。復興の景色を眺める被災者の傍らで、「もう少し一緒にその景色を眺めていたいと思った」とのさりげない一行は、この深みと拡がり映して余りある。

平易で読みやすい文体もさることながら、それらをはるかに超えたその奥行きと拡がり強い印象を刻まれた本書である。作家ではない仕方言葉、表現をよく耕して書き上げたプロセスは、おそらく著者のところ模様も大いに耕したことだろう。言葉の向こう側に耳を研ぎすます震災仮設住宅居室訪問活動は同時にところの耕し (cultivate) でもあり、私にとってはまさに文化 (culture) の源を知る貴重な機会ともなった。

(前理事長 清水新二)